

感想

暮らし環境や自然環境を見直していきたい!



御守(旧:野村) 享代さん
長岡京市在住。
自然に身近な教育教材と場所をつくるため準備中!



お母さん達のお話を聞かせていただきました。

月岡様の考えもあり、20代～30代、40代初期の主婦でお仕事もされている方と「みなとっこ」という保育サークルを運営されている方の3名にご参加いただきました。

場所は、月岡様が田村さんが働いている「ぎよそんセンター」の会議室を用意されていて、急遽ぎよそんセンターで働いている男性（50代～60代）の方も3名ご参加されました。

基本的には、最初は3名に同じ質問をさせていただき、それに対してお答えいただき、会話途中で他の話や伝えたいこと、聞きたいことを加えていきました。時間は13時から15時の間で、約1時間半の聞き取りと他は個別のお話やお土産をお渡しするなど雑談となりました。

今回お話を聞いた内容は、子育て、子供の教育環境の良さも悪い点に関して、3名のお母さん達に共通点がありました。つまり、1人1人が感じていること求めている事に大きな差がありませんでした。また、どんな母親でも父親でも思うことであり、行政規模、地域規模の課題と個人レベルで改善に向かうことの2パターンでありました。

まず、行政や地域課題は、やはり子供や子育ての教育施設サポートが整っていないことです。

実際に、都市から田舎へ移り住む際に誰もが考えてしまうのは近くに学校があるのか、子供が塾や習い事が出来るのかどうかという事だと思います。個人レベルでは、サークル活動を行っているけれど、お母さん自身が子供と楽しめる場所、居場所が欲しいという声がありました。

例えば、料理教室や洋裁などです。

今後、地元のお母さんや地域の方が地域を活性化させる可能性もありますが、現実的には友働きのお母さんも多く、意外とお母さんや子供の年齢層も広いため難しいのかなとも感じました。



また、ぎょそんセンターで働く男性（会長）さんは「都市との交流が定期的にあったほうが良いか？」という質問に対して「交流とは何か？なんでもかんでも交流と言えば良いというものではない。」と言われていて「明確にしていくべきだ」とも言われていました。また、お母さん達も交流を行うという事を考える機会がないためか、案や意見は出てきませんでした。

こういった都市と地方（田舎）の交流に関して多いのは、こういった点だと思われる。

それは、同じ京都府の過疎地域でも地域によって、都市からの人を受け入れる体制が整っている場所と個人レベルで人を受け入れている場所があり、それぞれ異なっているかと思います。

また、行政が市民と協働で体制を整えていない地域は特に誰かが間に入る必要性が高くなります。コミュニティサポートやコーディネーターとも言われますが、そういった方は、一度きりではなく現地の方との接点を持ち、会話を繰り返し、提案をする相手を選び継続的に交流を図らなくてははいけません。また、地元で活動的な方がもう一人いて、頼りになり仲よくなれる方がいれば良い結果が得やすくなります。

今回の聞き取りでも最終的な課題としてあげられたのは「空き家情報」でした。空き家の情報を出す側も受け取る側も、今後は「人が来てほしい」という目的を達成できるような仕組みづくりをつくりあげていく必要があると感じました。しかし、ここでも課題となるのは誰がそれをするのかということです。それが仕事であれば少し話しは進むかもしれませんが、継続的な雇用となるかどうかは解りません。

交通網が発達したことで久美浜市まで簡単には行けるようになったけれど、すぐ帰ってしまうことがマイナスにならない様な魅力が必要でだと思います。

例えば、都市にいる人は大抵同じ好みを持った人と知り合い付き合うしかありません。生活が非常に単調となり、それに慣れてしまいます。しかし、違う年代、感性、仕事を持ち、人生を歩んできた人と出会うことで未知に触れて刺激をもらうことができます。

場所や環境と同時に「人の魅力」を得れるメリットを引き出して出会う場所や都市より低価格で提供出来る場所や魅力を具体的にしていければと思います。

今回は、改めて都会と比べて違う環境であることを実感しました。また、今後、久美浜や京都府北部の教育的メリットを見出していきよい機会となりました。今後も調査や交流を継続出来るように考えていきたいと思っています。

